
ひねくれヒーロー

無花果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねくれヒーロー

【Zコード】

Z3070Z

【作者名】

無花果

【あらすじ】

NARUTO転生ものの皮を被つたナニカ。並行世界のNARUTOへ転生した後、原作世界ヘトリップ。逆恨みに嫉妬、恐怖と自嘲で構成されたヘタレ氣味主人公が覚悟を決める話。目的は生存、敵は虚弱体質と・・・ツツコミきれない天然忍者たち

死と共にはじめるものか、生である（遺書）

死と共にはじめるものか、生である

ホセ・マルティ

死と共に生じるものか、生である

地球温暖化が各地で叫ばれる最中、猛暑日が続くとある田

ある高校に異変が起きた

1人の男子生徒を担架に乗せ、慌ただしく保健室に運び込まれたもの・・・

部活の仲間や教員たちが青ざめた顔で祈る中、手当での甲斐なく熱中症で死亡した

黄色い太陽が焼きぬくしたような、夏の日だった

まさか、口酸っぱく注意されていた熱中症で死ぬことになるなんて
思いもしなかった

先生、職員会議もんだな・・・

いや、絶対それだけじゃ済まないだろうけどさ

悪いことしちゃったな

死んだっていうのに軽すぎるかも知れないけれど

今は本当にそんなことほんとうでもいいんだ

目の前の光景が明らかにおかしい

彼方には、見たことのある額当てにベスト、手裏剣やクナイを使つた牽制攻撃、もはや目では追い切れない回避行動

此方には、これまた見たことのある黒マント姿の男たちで、赤い雲が刺繡されている

マントを靡かせながら次々に人外的な攻撃を繰り出している

これが走馬灯なのだろうかいや絶対違う

巷で噂の・・・トリップとかいう奴だろうか

「これは神様が現れるのがテンプレだろうに、何をしているのか
現実逃避がてらまだ見ぬ神への暴言を考えた隙に、誰かの忍術の余
波が俺を襲つた

（ああ、靈体じゃなくて生身だったのか・・・）

傷口からとめどなく溢れる血を拭おうとした処で、俺の意識は途絶
えた

誰かの声が聞こえる

甲高く、それでいてか細い泣き声

声の主を探そひと皿をあけよつとして違和感に気づく

瞼がひびく重い

とてもじやないが自力では開けない

怪我の影響だらつか、包帯でも巻かれているのだらつかと考えているうちに、突如腹部が熱をもつた

じんわり、いや、そんな優しいもんじやない

熱を認識した途端、激しい痛みが俺を襲い、その衝撃で微かに瞼が開いた

ターバンの上に額当てを付けた青年と、まるで活らわしいことでも言わんばかりの目を向ける、白衣の中年たち

いつの間にか泣き声は止んでいたが、ここからが泣いていたわけではなさそうだ

三田円が掘られた額当て

そんな額当てがあつただろうか
もう長い間ナルトは読んでいないから新キャラだろうか、それとも
アニメのお約束、オリジナルだろうか

「・・・泣きもしないとは・・・気味の悪い器だ」

「いや全く・・・九尾の人柱力といえども、もう少し赤子らしさが
見たかったです」

九尾？

人柱力？そんな馬鹿な、ナルトはどうしたんだ、四代目はどうした、
お前らは何者だ？

どうして器と言つて俺を見てるんだ

「封印は無事に施された

しかし適合するかどうかはまだ分らぬ

地下神殿にて隔離せよ」

ターバン男が俺を抱き上げた

いくら忍者といっても、簡単に横抱き出来るほど俺は小さくなつた

俺は転生したのか？

赤ん坊から、一からやり直しなのか？

「畏まりました

もしものために医療忍者を数名傍に付かせます

・・・里長、姉君の、・・・御遺体はどう処理いたしましたか

「我が姉と言えど、こ奴は先代人柱力

他里に暴かれぬよう荼毘にふし、地下神殿に無縁仏として処理せ

「

短い返事を残し白衣の男たちは去つて行つた

麻袋に詰められたナニカを持つて

「・・・恨むなら、好きなだけ恨め

お前から平凡な人生を奪つたこの叔父を、この月隠れの里長を・・・
・恨んで生きていけ」

男は震えながら俺を抱きしめて、諦めたかのように呟いた

この記憶を最後に、6歳までの間、俺の意識は途切れることとなる

神を信ずるか信じないか、感情の問題である（前書き）

神を信ずるか信じないかは常識や倫理や議論の問題ではなく感情の問題である。

神の存在を立証することは、それを反証することと同じく不可能である

カマセイ・アーモーム

神を信ずる「J」とは、感情の問題である

今日は6度目の10月10日

この世界に転生した日、俺の誕生日

太陽の当たらぬ地下神殿、そこが俺の唯一の居場所

大いなる化け物を、尾獣を封印している巫子さまとして恐れられ、
敬われ、軟禁されている

供え物を運んでくる周辺住人と面会する以外、何一つすることがない

いつも傍で控える、医療忍者から情報を収集することで暇をつぶす

分っている」とは、この世界はNARUTOによく似た別世界だと
いうこと

木の葉と違う里は存在しないということ、そもそも火の国自体が存

在していない」と

この国は火ではなく、田の国、太陽神を奉る小国

そんな太陽神のもと、御国のために働く月隠れの忍び里

ここが、俺の生まれた場所

そして今日、誕生日でありますから悲しいお知らせが発覚した

戦争兵器として扱うべく、大切に、しかし放置氣味に育成されていましたにも関わらず

俺には忍者の才能がない、との判断が下され一生幽閉されることが決定した

理由は簡単

チャクラコントロールが出来なかつたのだ

いや、そもそも文字を習得しただけの段階で、教科書だけでチャクラとかいう意味のわからんものをコントロールさせよつといつのが間違いなのであつて！

俺自身に問題はない！・・・と、断言出来ればいいのだけれども

虚弱体質である俺は、生まれつき忍者に向いていないと言われていた

九尾が入つたまま、地下暮らし

出来ることとは読書（宗教関連のみ）だけ

ははつ 泣きてえ

せめてもの救いは、九尾が割と友好的だといつことだらつ

いや、もっと小さこ頃は体を乗つ取ろうと、画策してたらじいんですがね

精神世界で殺氣を向けられる度に失神、発熱、生死の境を彷徨うと

いつ流れが確立し、いつやいかんと思われたそうですが

その発熱の影響か、俺の記憶はここ最近まで飛び飛びです

そして九尾=命に関わるところ図式が体に刻み込まれたため、声を
かけられただけで気絶する始末

完全にトラウマですありがと「」やれこれました

いいよ不貞寝するから

それしか出来ないからな

チャクラコントロール・・・出来たら、もっと俺違つてたのかな
才能 があつたら、ナルトみたいにアカデミー通つて、友達作れ
て、忍者になれたかな

せめて体が丈夫だったら、ロック・リーみたいに体術で頑張れたかな
なんで俺、こんな体に生まれてきたんだろう

才能があれば

もつと丈夫な体なら

・・・そもそも、転生なんて、なければ

こんなことには、ならなかつた

妬ましい、とはこの事だらうか

憎い、とはこの事だらうか

なんで俺をこんな風に転生させたんだろ？神様は

見たこともない、居るのかもわからぬ神をただただ信じじて

なかばハツ当たりのようこそその存在にケチつけて

頭を抱えてしまつたりして

「・・・・ハハハ・・・」

抑えきれない嗚咽が零れる

なんでもないのに、いつなつたことは仕方がないのに

布団にぐるまり口元を押される

泣けば全部すつきつする

いやな気持ちは全部涙が溶かしてくれる

そう信じて、泣き続けた

暗く、黒い涙が落ちてくる

この狭いとも、広いとも言える牢獄に溢れだしている

「うしょくもない恨みと妬み、そしてほんのわずかの怒りが溢れて
いる

あの小さな宿主が泣いているのだろう

正氣を取り戻して泣いている

「・・・哀れな仔・・・」

先代の宿主は、かように脆弱なものだつただろうかと溢し、

尻尾で涙の洪水を一掬い

鈍い音を立てて、毛どころが身をもを焦がした

大いなる獸よと、大妖怪よと讚えられた、この我の身を焼き尽くす涙

凝縮された恨み

我以上の恨み

「本当に・・・哀れな・・・」

せめて最後まで、天寿を全うするまでは守ろうつ
それが狂わせてしまつたことに対する、せめてもの償いのはずだから

たとえ今日負けても、人生は続くのさ（前書き）

たとえ今日負けても、人生は続くのさ。

メチージュ

たとえ今日負けても、人生は続くのさ

18歳の誕生日の朝が来た

相も変わらず軟禁・地下生活

度々吹っ飛ぶ記憶に、自分に何らかの障害が起きていることが理解できた

肉体的なもの以外に精神にも異常があることから、生まれながらの虚弱体質が原因だと断言できない

九尾の声・・・ああ、そういうばパルコと呼べと言われたつけ

尾獸・パルコの呼びかけがある度に発熱するのが、異常の原因なのか

生まれつきの虚弱体質か、それともこの地下での軟禁生活か

あるいはこれら全てが原因なのか

パルコの言では、このまま行くと、俺は30歳ぐらいで死ぬ確率が

高じようだ

熱に魔されながら、早死にやだなーとおぼろげに考えていた口が懐かしい

俺はきっと、今日にでも死ぬのだろう

腰元に迫つくる水を眺めながら椅子に座した

昨日初めて知つたことだが、なんとの世界にも”暁”は存在していたのだ

ここ最近信徒さん来ないし、里上層部も傍付きの医療忍者も慌ただしいので聞いてみたところ

この国、他国と絶賛・戦争状態だそうです

昨日、敵国の雇われ集団”暁”に襲撃されたそうだ

そして本日未明、暁による地下神殿への襲撃が始まった

傍付きの誰かと暁が交戦したらしく、水遁が使用され水責めに近い

ことになっている

原作でも同じように何処かに雇われていた暁だが・・・この世界で
も同じらしい

ということは、だ

尾獣狩りも行われている可能性がある

木の葉の里ないけど、マダラとかいるの?と思つたけれど別人が黒
幕かも知れん

予想でしか考えられないが、人柱力である俺が狙い・・・なのか

もしそうなら、近いうちに尾獣を抜かれて俺は死ぬ

里の人間は助けてはくれないだろう

我愛羅のように、命をかけてくれるような人は・・・いないから

「九尾の人柱力か」

ついにやつてきた雲の外套の男たち・・・って、八人もいる？

おいおい、たつた一人の人柱力相手に大人数で囲むとは大人げねえ

俺に戦闘能力があれば原作知識で逃げ切れるんだろうけど・・・

病弱巫子様の噂は他国にも流れてるって言う話はどうにに行つた

しかし原作通りのメンバーだな・・・いなのはペインと小南の2人か

トビがいるということは原作通りマダラが黒幕かな

「・・・なー旦那、あれマジで人柱力かな?
なんかすげえチビなんだけど、うん」

生”うん”頂きましたありがとうございます

しかしサソリはビルの姿か

「婦人方の間で美少年と名高い本体を見てみたかったな

「・・・小さきるな」

「やつぱり？座ってるからかなーって思つてたんだけど、うん
鬼鮫の腰ぐらいいしかないよな、うん？」

そんなに身長が気になるんだつたら立てやるよ勝手に測れ

「あ、立ちましたよ」ティダラセンパイ
「うわ、ちつちゅ」

「・・・大体140？といったところだな」

「肉食わねえからじやねーの？」

「ほら、坊主とか肉食禁止してんだろ？」

「えーっ太陽教にそんな戒律ないっすよー
ボク信徒だから知つてますよ！」

なんだかノリがとてつもなく軽い

原作の凄味はどうやらやつたんだ

飛段とトジはともかく、角都、田瀬で身長を測るな悲しくなる

ギャーギャーと敵地で騒ぎだす男たちを押しのけて、一人前に出てくる

・・・イタチだ

「信徒として非常に心苦しいが・・・巫子殿、抵抗せず御同行いただこう!」

トビコや、マダラもイタチもつちの信徒?

つちは一族は月隠れに住んでいたのだろうか

この世界における木の葉隠れの里は月隠れの里ってことでいいのか?

・・・どうでもいいか

両手をあげて降参のポーズ、意味は通じたようだ

水の抵抗により、足取りは格別に重く、牛以下の歩みでイタチに近づいて行く

宿主、正氣か?! 彼奴等に大人しくついて行くなど、何を考えているのだ!

パルコの切羽づまつた声が響く

ズキズキとした痛みに顔を攢める

直に発熱して、倒れてしまうだろう

だけど、今は、今だけは倒れちゃダメなんだ

何も出来ない俺が出来る、唯一の意地の張り所なんだから

胃の腑から何かがせり上がりてくる

喉を逆流し、口の端から垂れ下がる液体

「・・・暁の、目的は」

わずかに目を見張ったイタチを尻目に、問いかけた

真つすぐ天をさし、疑問を浮かべた男たちがその指に注目する

口を開くたびに赤い飛沫が見えた

トビに向かい、問いかける

「 月か?」

何を、宿主よ、何を知つて

九尾の困惑、迫りくるトビ

ああ、やっぱり原作と同じだったんだ

熱を上がってきたのがわかる、もう立つていられない
目にも止まらぬ速さで俺の顔を覗き込んだその目は、赤く、
いていた

軽く笑つてみたら、有無を言わさず氣絶せられた

何がどうなったのか

我が精強なる月隠れが、傭兵集団「」とさに敗れ去るといふのか

眼下に頃垂れる負傷者たちにかける言葉も見つからず、里長としての責務も忘れて神殿に向かう

あの地下神殿が顯在であれば、他国に散らばる信徒たちを焼きつけて奴らに対抗する事が出来る

早く、早くと焦りすぎたせいか、側近たちは周りから姿を消していくしかし、早く到着する事が出来たことに安堵したのも束の間のこと

信徒用に作られていた、重厚な石造りの入り口が無残にも爆破されていた

神殿関係者のみに教えられる出入り口から地下へと降りる

クナイや手裏剣、爆発や様々な術の痕跡

地下に降りるたび、その傷跡は深く、激しい戦いがあつたことを知らされる

水浸しとなつた大広間へとたどり着き、柄にもなく叫んだ

仮面の男が子供、いや、小柄な青年を抱き上げている

口から血を流し、青褪めながら気絶しているその青年は、まぎれもなく我が里の人柱力で　俺の唯一の甥であった

「その子を離せッ！」

仮面の男は振り返ることもなく、人柱力を連れて消えた

また、周囲にいた男たちもそれに翻ひつかのように消えていった

負けた

完璧な敗北だった

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い（前書き）

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。

愛、ただこれによつてのみ人生は与えられ、進歩を続けるのだ。

ツルゲーネフ

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い

守つてみせると誓つたのだ

他の誰でもない、自分自身に誓つたのだ

あの仔を守ると誓つたのだ

誓つたといつて、何故我は何もできない？

何故助けてやれない？

拷問を受け、我を抜かれ死を待つだけのあの仔を、どうして助けてやれないのか

トビと呼ばれた仮面の男が、黄泉路へ旅立といつとするあの仔を引きずり上げる

切り刻まれた体、首に絞め跡、幻術を見せられた虚ろな目、毒が混じりあい濁った唾液が滴り落ち、手足は碎かれ爆破された何の抵抗も出来ないあの仔を助けられない

何が尾獸か、助けることもできない無力な獸が、何が尾獸か

必死に模索する

助ける術を、見つけなければならない

ふと、記憶の隅に追いやった術を思い出す

時空間忍術、まだ我是完全には封印されていない、チャクラの使用は可能だ

出来る、守れる！

藁をも掴むかのように、チャクラを練り上げる

彼奴等に気づかれない前に、早く、逃がさなければ

「・・・九尾め、時空間忍術を利用したところで 人柱力はもう持たんぞ？」

仮面の下で嘲る声が聞こえる

「 ああ、そりだな

我が抜かれた、ただでさえ弱い体はもう、じきに果てる

もひへ、心臓の音も止んだ

トビがまるで汚物を捨てるよひに投げ捨てた

「ならば大人しく封印されていろ」

そういう二ングエン如きの思い通りになつてたまるものか

「抜かれて足りぬのであれば、詰めて満たせばよからうつ~」

そつ言つて笑つてやれば、目が赤くきらつきよつた

全く、これだから二ングエンは好かんのだ

最後の術を発動させる

火があの仔を包み込み、我が尾を2本入り込ませた

もひへれ以上してやれることはない

あとはただ、成り行きを見抜かれて

「・・・あ、の、ばぐばづま、・・・

診てくれた医者の腕が良かつたのか、なんとか動かせた
なかば炭化していた右腕を動かそうと力を込める

白い柔らかなシーツの冷たさが、体の火照りを冷ましてくれる
そのジクジクとした熱さが、黄泉路への灯火だということを知った
痛みと苦しみ、恨みと嘆きが合わさつて胃の腑を燃やした

「…がぜつでーなべ・・・げほつ」

口内に溜まつた血で嘔せ返る

2、3分ほど嘔せ続け、ようやく落ち着いた

何をやつていたんだろうか

意地をはつたところで、現状をひっくり返せる力を持たない俺に何
が出来たというのか

結局マダラに警戒され拷問を受け、洗い浚い吐いただけじゃないか
そうして死を待つだけの俺に、あの狐は何を考えていたのか
なんで俺なんかを助けた

お前なんか嫌いだったのに、恐がったのに

涙が溢れて止まらない

「おお、起きたか！」

白髪に赤い隈取り、眩しく笑った老人は、伝説の三忍・自来也

手に水の入った桶に真新しいタオル、どうやら助けてくれたのは彼らしい

礼を言うことも忘れ、溢れる涙をぬぐつことも忘れ、ただ呆然と口を開いただけだった

愛する者に欺かれている方が、幸福である。（前書き）

愛する者に欺かれている方が、時として眞実を知らされるより幸福である。

ラ・ロシュフー＝コー

愛する者に欺かれている方が、幸福である。

「両足と切り傷は大体治せたが……手のほつは時間をかけて治療することになった
……とにかく、目覚めてよかつたわい」

からうじて動かせた右腕を見てそつまつた

顔周りに飛び散った血を、タオルで拭い取ってくれる

何から話せばいいのか、何がどうなっているのか

混乱しそぎて分らない

「お前さんは そうじゃな、5日ほど睡眠状態でな

わしの知り合いの医療忍者に治療されてしまふやく落ち着いたんだ」

知り合いの、医療忍者？ツナデか？

「あとは、お前さんが何者なのかといつのも知つてある

・・・の、並行世界の人柱力よ」

「はあ！？」

「ちよ、げほつぐえつ・・・並行世界だとー？」

好々爺とした表情が一転、剣呑としたものに切り替わる

「どうこいつことだ？何故俺が人柱力だといつことを知られている？

しかも並行世界？なんなんだ、こいつはどうじだ？

「あ、おじえでくれ！」

「こいはせづれ、円隠れの里、もじげはざとの周辺だらつ」

喉を痛めているからかろくな発音にならない

またもや血が飛び散り、それを拭つてもひつ

「落ち着けい、体に障る

・・・こいは湯隠れの里にある湯治施設だ

御主がこいの隠れの里とやらは存在せん

なんで湯隠れ・・・ああ、覗きか変態仙人

布団の傍にあつた水を飲ませてもらひつ

血が混じつた嫌な味がしたが、幾分か喉の痛みが和らいだ

「・・・なんで、あんだばそれを知つていいる?」

「五日ほど前、わしが山道にて倒れた御主を見つけた

パルコと名乗つた九尾が、わしに全てを教えた」

パルコさん、貴方何をしてらっしゃいますか

自来也はまっすぐ俺を見て、5日前の出来事を語りだした

金色の光が、炎で出来た卵を庇つかのように包み込んでおった
そしてわしは見た、鮮やかな金色の光が空間を引き裂いた瞬間を

新たなネタを、と思い山道を駆み歩いておつた

しばらく通い続けた湯治場から、隠れた名店たるこの施設のことを見
聞いてのう
「わしは自來也といつての、物書きとして取材旅行をしておつた
ここ湯隠れの里は良い観光地で、若いおなじげふん・・・インスピ
レーションを湧きたてる場所だ

空間の裂田からは黒い禍々しい炎が、光を追いつめるかのように溢れ出た

裂田自体は直に消え去ったのだが、残りの黒炎は光に一太刀浴びせてから消えよつた

そのうちに光は狐の姿をとり、わしに氣づいて交渉を持ちかけた

もはや息絶える寸前の者の願いを切り捨てるほど、冷酷ではないんですね

わしはパルコの願いを聞き入れ、引き換えに知識を渡された

喉が渴いたからか、それとも、次の言葉に悩んだためかここで自ら
也是言葉をつぐんだ

「・・・知識？」

「うむ・・・

日の国、太陽教、地下神殿、そして・・・暁のことだ

お前さんが人柱力で虚弱体质だということを教えられた

「・・・炎の、卵つで？」

「お前さんにはパル」の2本の尾が入つてある
そのうちの一本が防衛機能として作りだしたのが炎・・・そうじ
やの、狐火、とでも言おつかの」

もう一つは生命維持に使われてある

遠い目をしながら説明される

思わず右手で腹を撫でた

・・・命が助かつた」とよりも、それに対する謝罪よりも先に思い
浮かんだのは疑問

何故、と声に出でずかずく

答えは返つてこない

「・・・パル」の、いつも言つておった

あまりにも不憫だったのだと、思わず憐れんでしまったのだと、
な

思考が停止した

憐れみ？

ああ、そうだな、いつだってあいつは俺をひ弱だの、未熟だの、可哀想だとのたまいやがる

そうか、不憫か

不憫な境遇になつたのはてめえの存在だと知つて抜かしたか

自来也の目が、ひどく冷めたように見えて、哀れんでいるようで憤つた

「・・・見返したいか？」

自来也の手が俺の目を覆つた

じんわりとした暖かさが体に染み渡る

何だらうこれは、どこかで感じたことがあるのだけれど分らない

「今までチャクラが扱えなかつたそつだの

しかし、パルコのチャクラがお前に力を与えた

「これからわしが修行を見てやる、パルコの巫女よ、忍者になれ」

思わず涙があふれた

大声で泣きわめくことはなかつたが、それから小一時間は泣き続け
ていたと思つ

泣き疲れて眠るひに俺はぼんやりと誓つた

パルコの守りが、狐火が必要ないぐらい強く生きよう

チャクラが使えないても、忍者になれるとい、証明して見返してやろう

眠りに落ちた時、金色のお日様が笑つた気がした

竜胆よ貴方に届け（前書き）

竜胆の花言葉

淋しい愛情、
悲しみにくれているあなたを愛する、
貞淑、勝利、的確、正義感

竜胆よ貴方に届け

本当にこれで良かつたのか

いへり約束と言えど恨みを糧とする生き方をさせて良いものか

「難儀だのう・・・」

泣き疲れて眠つた子供、いや違つた、青年を見る

赤く腫れた目蓋が痛々しい

ふと、腹部を見る

弟子である四代目火影が使つた封印術と似通つた術式

並行世界の九尾・パルコが言つたように、この世界とあちらの術は
類似しているようだ

「・・・必要ならば嘘もつぐが、本当にこれで良かつたのかのう・・

」・

瞼を閉じればすぐ思い出せる

決して忘れてはならない記憶、語ることは許されない記憶

これは取引だ、仙人よ

取引、だと？わしにそんなものする必要はないんだがのう

僅かながら宿主の記憶は我と同調している

ゆえに、御主の最期と木の葉の行く末も理解してある

息も絶え絶えに笑った九尾

何故そこまで人柱力の助けを求めたのか

なあに、毎回声をかけただけで死にかけられると同情もあるさ
・・・それに、償わねばならぬからな

炎の卵が解れしていく

中にいたのは満身創痍の子供

何も出来ないと思いつめ、追いこんでしまつたのは我が原因
なればこそ、我が守るべき・・・

しかし、今となつてはもう守ることも出来ぬ

・・・せめて、戦う術を、叶うならこの仔の夢であつた忍びにしてやつてくれ

子供を見るその田に嘘はない

だが・・・

・・・九尾、いや、バルコと言つたな
お前にひとつこの子はどういう存在だ?

田を見開いて空を仰ぎ見る

困つたような、照れたような動きが尾獣とは思えない仕草だつた

どのような存在と言われても・・・はじめは、恨みと哀れみだけで・・・

しかし、名を貰つてからは・・・成長を、見守りたいと思つたのだ

だ

これが、尾獸か？

いや、違う

こやつは、親だ紛れもないただの親だ

・・・貴様の弟子の子を、この世界の人柱力を守りたぐば”曉
”を探れ

里を守りたぐば、蛇の動向を探ると良い
詳しいことは、宿主から聞け

もつと長くは持たないと溢し、子供を託される

なんと子供の軽いこと、氣絶しているはずなのに重みが感じられない

派な忍びにしてみせよー！
あい分かつた！
この三忍・自来也、御主の命がけの嘆願を聞き届け、必ずや立

胸をはって答える

親から子を預かるのだ、自信がなければ心配するだろつ

・・・そして、どうか宿主には伝えんてくれ

頼む

九尾パルコは、ただ憐れんだだけだと、そう伝えてくれ
宿主が正気を保てるのは、誰かを妬み、恨んでいるときだけな
のだ

・・・ 一体全体何だといつのか、こやつらの関係が理解できん

それと大切なことを忘れていた

宿主は今年で18歳、分別のつく年頃だ

まさに衝撃といつていい位、すさまじい発言だった

こんなに小さいのにか！？

そう叫べばもうパルコは光の粒子となつて消えていた

「・・・しかし、パラレルワールドの狐だからパルコとは・・・
案外安直な奴だの、お前さん」

運命は我らを幸福にも不幸にもしない（前書き）

運命は我らを幸福にも不幸にもしない。
ただその種子を我らに提供するだけである。

モンテニコ

運命は我らを幸福にも不幸にもしない

「」は湯隠れの里

観光地として有名な湯治施設を多く保有する、忍びの隠れ里とは思えない平和な里だ

月隠れからこちらへ逃れて4ヶ月

地元住民と交流を持つに至つたこの俺だが、残念な子と評されている

それはなぜか

「おいらHロジジー！
テメエ俺を囮にして逃げるんじゃねーぞ！」

三日と開けずに騒動を起こす人物の連れだからだ

俺は簾巻きにされ、Hロジジーこと自来也に覗き場へ引きずられて
いる

取材と称して覗きを行ひジジイの悪癖に付き合わされるたびに、こ
れも修行と言われて俺が囮にされるのだ

覗きがバレて女性客に追われる事もある、俺が施設の人々に怒られる事もある

理不尽だ

「Hの自來也さまで向かつてHロジジイとは何事か！
そんなんだからお前は大きくなれんだ」

呆れたように溜息をつかれる

こいつのまつが呆れているところ、Hのジジイ反省の色もない

「関係ねーだろうが！……げほつ
あ、あのねーちゃん良い尻」

覗き場に到着すると、微かに見える女体を観察する

胸も良いものだが、尻も良いよね

「何ー？」

途端田を輝かせ鼻息荒く覗き始める

本当に何故こんな男が伝説とまで呼ばれるのだろうか

立派に育つた弟子、四代目火影に申し訳なく思わないのか

あと弥彦と長門と小南に謝れ

三代目火影は割と口かつたのでもうと同類なんだろう、多分

メモをとりながらヒートアップしていく自来也を尻目に、深く溜息をついて・・・咳きこんだ

良かった吐血しなかった

場所を移して人里近い野原に向かい合つ俺たち

「よしよし、本日の取材はこれまで!
それでは修行の時間といふかの」

にんまりと笑われたのがムカついて脛を蹴りつとするが、案の定軽く避けられた

「そんな見え見えの蹴りじゃあたらんぞ？」

頭に手をのせられる

18歳だと知っているのにこの行動、おちよくつている、ここにはおちよくつてやがる

「・・・わわと修行つけろよ」

手を払いのけてやる

そつするとカツカツと笑つて座りこまれた

「つむ、それではいつも通り瞑想からだ、座れ」

以前チャクラコントロールのオがないと言っていたが、自来也の修行を受け始めてから少し変化が見られるようになつた

そもそも、チャクラとは肉体エネルギーと精神エネルギーを練り上げたものだと言われている

人間に生まれつき備わっている力がコントロール出来ないわけがない、そう自来也は断言した

神殿時代、教科書見せられて後は放置という状況に問題があるのでとも言つた

チャクラはあるのだからどう練り上げるのか、どう扱うのかを教えなければ使えるわけがない

慰められるかのように語られた

・・・確かにそうだよな、いきなり教科書見せて試合やれとか言われたことないわ

ぶつけ本番にもほどがある

「コン、集中が乱れとるぞ？」

自来也に指摘されて思考の渦から引き戻される

再び瞑想に集中する

俺の腹部に熱が籠もる、自来也が唸つた

また失敗か、溜息をついて立ちあがり、皿を開けると炎に包まれていた

「うーむ、やはりバルコのチャクラしか引き出せんか

首をかしげて悩まる

・・・自来也に修行をつけてもうつて早三ヶ月、未だに俺自身のチャクラを練り上げたことがない

瞑想すると必ず九尾の、バルコのチャ克拉の残照たる狐火が俺を覆うのだ

俺自身のチャ克拉は練れないが、この狐火を扱うことは可能になつた

覆わせることしか、出来ない防御用だけどな

これはきっと我愛羅の砂と同じなんだろうか

「とりあえず狐火纏つたままリハビリ運動せい」

不燃布で作られたクッシュョンを手渡され、関節運動を始める

切り傷とか爆破痕は治ってるんだが、サソリに飲された毒の影響
が残っていて体が動かしづらい

寝こんで関節を曲げたり伸ばしたりしていると、そそくさと木桶
と水差し、タオルに着替えまで用意される

ふつ過保護師匠め、慣れてきたリハビリ運動で吐血なんぞ、もつし
ない！

せっせと用意された看護用品を横目に勝ち誇った笑みを浮かべた

その15分後、血塗れになつた上着を洗つ姿が住民に目撃された

湯隠れの里内部、決して未成年は入り込めない風俗店が立ち並ぶ裏路地

2人の男が居た

「・・・なー角都よオ」

1人は鎌を持つた黒い外套の男

連れであるもう1人の覆面をついた、同じく黒い外套を身に付けた男、角都に話しかける

「・・・黙つて歩け」

「俺ら、尾獣狩りしてんだよなア？」

立ち止まる角都、訝しげに連れを見る

「どうした? どうどう頭がイカれたか?」

「冗談抜きの低い声、医者によるか? と声をかけた

「・・・なんか癪に障るけどよ、今は良いや
俺ら、九尾の人柱力って、捕まえた・・・よな？」

「・・・飛段、お前死に過ぎて頭が・・・」

冷や汗をかいて飛段を哀れむ

それに激怒するはずの飛段から何の反応も返つてこないことがまた不審がらせる

「いや、捕まえたって・・・あれ？でもまだ尾獣狩りの説明されただけ？」

まだ人柱力の居場所探しの途中で・・・あれ？」

頭を抱え始めた飛段

自分でも何が何だかわからないと騒ぐ

「あーツわかんねえ！」

「そうだトビに聞きやいいかつてトビって誰だ？」

・・・うーん・・・鬼鮫あたりならわかるだろ、な、角都ウ！」

納得したらしく、立ち止まつたままの角都を置いて足早に歩き出す

「・・・・・・・・・・・・

溜息をついて仕方なく歩きだす角都
騒がしい相方に疲れが出てきたようだ

「・・・・・結局何だったんだ・・・・」

聊か肩を落とし年相応の哀愁を漂わせる

寂しげに風が外套を揺らした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070z/>

ひねくれヒーロー

2011年12月20日17時48分発行